

第4回 川越市総合計画審議会 議事要旨

1 開催日時 令和7年5月22日（木）午後2時00分から午後3時45分

2 開催場所 川越市役所 7AB会議室

3 出席者 眞下英二（副会長）、神田賢志、池浜あけみ、栗原瑞治、小高浩行、
（委員） 山木綾子、小ノ澤哲也、石橋裕、西川亮、崎幸子、石川真、焦雁、
高橋健治、岡村淳子、牛久保努、関口俊一、福田智江子、
*敬称略 山岡俊彦、櫻井晶夫、福木孝、飯島大輔、佐藤光

4 欠席者 横田等（会長）、筑井麻紀子、及川康、増田俊和、新井康夫、山口陽子、
（委員） 岡野一明、松本隆
*敬称略

5 会議の概要

1 開会

2 副会長挨拶

本日は前回に引き続き、総合計画の基本構想について御審議いただくことになっている。本日は会長が欠席ということで、代わり進行を務めさせていただく。よろしくお願い申し上げる。

3 議事（◎副会長 ○委員 ・事務局）

（1）第3回審議会における意見について

○当日資料1-1（参考資料）に、川越シャトル・かわまる利用者数が示されているが、一方は1便当たりで他方は1日当たりで集計されている。集計方法が違って分かりづらいので、どちらかに統一できないか。

・川越シャトルについては現在12系統が運行しており、1便当たりの利用者数で集計している。かわまるは区域運行で、実際に予約を受けてから運行するため、予約状況によって1便当たりの利用者数にぶれが生じてしまうことから、1日当たりの利用者数で集計している。運行形態の違いによるものであることを御理解いただきたい。

◎第五次総合計画の基本構想における基本目標と分野別の方向性については、事務局案と、前回と今回の審議会でもいただいた御意見を踏まえることとし、これらをもとに分野別計画を策定していくことでよろしいか。

（「異議なし」の声あり）

異議なしの声をいただいたので、今後はそのような形で進めてまいりたい。

（2）「将来人口」について

○川越市の人口は転入超過によって毎年1,500人ほど増えている。外国籍市民の割合も増えているということだが、どの程度増加しているのか。

- ・外国籍市民については、令和5年1月の9,413人から令和6年7月には1万993人と、年々増加している状況である。
- 人口減少を抑えていく方向性だと理解した。外国籍市民を増やす、転出を抑制するなど、具体的にどのような方法を重点的に取り組んでいく考えなのか。
- ・川越市を選んでいただいて転入数を増やすこと、川越市に長く住んでいただいて転出を抑制することの両方で施策を展開したい。
- ・転入・転出については、就労や結婚、就職が大きな要因と考えられており、企業を誘致して就労の機会を増やすなどの取組が考えられる。このほかにも都心に近いという地理的な要因もあるので、この取組をすれば大丈夫ということはないが、これらの要因をしっかりと分析して、川越市に住みたい、長く住み続けたいと考える方や、川越市と交流を深めたいと考える方を増やしていきたい。
- 住み続けるという点では、こどもや若者に向けて川越市への愛着を育む取組も必要である。分野別計画では、定住促進に効果的な施策が入っているかという視点からも検討させていただく。
- 当日資料2の図3で出生率の推移が示されているが、令和元年度の6.6から令和2年度の7.2に急増し、令和3年度は6.0に下がっている。急激な増減の要因について、どのように分析しているのか。
- ・令和2年度は国勢調査が実施された年で、総務省統計局が公表した国勢調査人口等基本集計を基に出生率を算出した。それ以外の年は、埼玉県総務部統計課の集計による出生率で、住民基本台帳人口を基に算出している。基になるデータの違いから、国勢調査の年とそれ以外の年で数値にぶれが生じたものである。
- 今年も国勢調査が行われるが、再び出生率にぶれが生じると、正確な推移とはいえない。性質の違う数値を同じグラフで用いるのは適切ではない。
- ・従前の国勢調査は対面を原則としていたが、令和2年度の国勢調査は、コロナ禍を理由に対面調査を控えるなど、調査手法に変更があった。また、令和2年度の出生率について、他の年度と同様に住民基本台帳人口を基にした数値は確認できなかった。異常値かもしれないが、やむを得ずお示ししたものである。
- 統計は、同じデータの取り方をするのが前提であり、違うデータを使ってグラフを作るのは、統計手法としてやってはいけないことである。5年に1回数値がおかしくなることについて、市民から疑問の声が出るのではないか。
- ◎御指摘のとおり、統計では別のデータを混ぜてはいけないというルールはあるが、事務局から説明があったとおり、国勢調査のやり方が変わったことも影響していると思う。今後このようなデータを用いる際に検討されたい。
- 当日資料2の図1で社会増減の状況が示されているが、私見では、転入していただく方は経済活動や社会活動が活発な方が望ましいと思う。転入していただく方の属性等について考えはあるのか。
- ・総合計画とは別に、まち・ひと・しごと創生総合戦略を策定しており、その中では子育て世帯の転入を目標の一つに掲げている。子育て世帯に魅力を感じてもらい、川越市に転入していただくような施策を展開していきたい。

- 目標はとてもよいと思うが、それだけではなくて、例えばお金をいっぱい使う人や仕事をいっぱいする人、自治体とのコミュニケーションをいっぱいする人などにも、ぜひ川越市に来ていただきたいと思っている。
- もう1点、当日資料2の図2で自然増減の状況が示されているが、死亡と空き家率の増減については相関関係があるのか。
 - ・空き家の件数は、平成20年をピークに減少傾向にあると認識している。
 - ・確認の上、次回の審議会で説明したい。
- 第四次総合計画後期基本計画の人口推計では、令和10年の35万5,924人がピークになっている。その一方で、当日資料2の図4で総人口の推移が示されているが、令和3年の約35万3,697人がピークとなっている。推計と実績の乖離について、どのように分析しているのか。
 - ・全国的に人口減少に拍車がかかっており、その影響で本市の人口も推計より早く減少傾向が見られるようになったものと考えている。
- もう少し詳しく分析した方が良いのではないのか。出生数が予想よりも少なかったのか、死亡数が多かったのか、転入・転出の乖離があったのか等について分析する余地がある。また、現在の人口が維持できているのは外国籍市民が増えたことが一因である。それを示すためにも、日本人の人口と外国籍市民の人口が分かるようなグラフがあったほうが良いと思う。今後の分野別計画を意識して、外国籍市民の成人が増えているのか、児童生徒が増えているのかについても分析してはどうか。
- 当日資料2の図1で転入・転出の状況が示されているが、令和2年度だけ数値が下がっている要因は何か。
 - ・令和2年度、3年度については、コロナ禍の影響が大きいものと考えている。

(3)「将来都市構造」について

- 当日資料3で、「準地域核地域を設定してしまうと、拠点としての機能が拡散してしまい、コンパクトなまちが形成できなくなってしまう」とあるが、「コンパクトなまち」の規模について、何か基準があるのか。
- 同じ資料で、「市街化調整区域が定められており、開発が困難」とあるが、他市では市街化調整区域だったところを開発している事例もある。この点についてどう考えているのか。
 - ・立地適正化計画では、居住誘導区域や都市機能誘導区域を設定して、一定の人口規模を維持することとしている。具体的には、1ヘクタール当たり80人程度の人口密度を目指しており、生活核に関しても同じ考えである。なお、生活核は立地適正化計画上の区域よりも抽象的な区分けであり、具体的な面積は定めていない。
 - ・市街化調整区域は、人口が拡散しないように設定する区域である。しかし、土地利用を図るべき区域として総合計画等に位置づけられた場合は、地区計画を決定することなども将来的には考えられるが、現状の将来都市構造は資料1でお示ししたとおりである。
- これは基本構想なので、立地適正化計画と比べてどちらが上位計画かといわれると、当然、基本構想のほうが上位である。立地適正化計画の趣旨も理解できるが、それを踏襲しているだけでいいのかという視点も踏まえて、委員の皆さんに御議論いただきたい。
- 将来都市構造図が、第四次総合計画とほとんど同じである。ただ、芳野の工業団地から南古谷駅方面に向かう主要幹線構想道路が、実際の道路として示されており、少しは進歩したの

かなと思う。南古谷駅は、令和9年度に橋上駅舎化して北口が開設される予定になっている。これにより、地域核にふさわしい地域になると期待しているが、駅のすぐ近くが市街化調整区域で今のところ何もできない状態である。都市計画マスタープランでは、住居又は産業用地となっているので、それを反映できないか。

○芳野の工業団地から伸びる仮称東環状線が川越街道に交わる地域は、有力な産業用地になると考えるが、産業用地として指定できないか。

○ふじみ野市では流通用の大きな倉庫が建設されるなど、大規模な開発が計画されているが、川越市ではそのような計画はないのか。

・南古谷駅の北口開設や仮称東環状線の整備といった道路や交通結節点を整備することにより、人が集まりやすい特性を生かしたまちづくりを行うことは非常に重要であると考えている。具体的な事業計画について申し上げることはできないが、市としては市外から企業に立地していただいたり、あるいは市内の企業が市外に流出しないようにしたりするため、しっかりと事業用地を確保していくことも大事だと考えている。市街化調整区域においては開発のハードルがやや高くなるが、交通機能の向上に合わせてきちんと特性を生かした企業誘致ができるように進めていきたい。

○南古谷駅周辺は、市街化区域はだいたい住宅が建っている。唯一空いているところが市街化調整区域で開発が難しい状況なので、ぜひ都市計画マスタープランどおり住居又は産業用地として活用できるようにしてほしい。

・本日は将来都市構造図について御議論いただいているが、御指摘いただいた産業用地等の土地利用箇所については、今後、土地利用図をお示しして御議論いただきたい。

○資料1の14ページの「軸」について、「都心核、地域核及び各拠点の間の連携」とあるが、今後の方向性、ビジョンのようなものはあるのか。

・鉄道やバスなどの都市活動軸については各拠点をつなぐ重要なものである。これらを維持し、移動の円滑性や利便性の確保を図りたい。

○地域核同士の連携あるいは地域核と都心核との連携のために、「軸」として交通関係を整備する必要があると理解した。具体的な連携として、例えば観光や商業、経済、教育、様々な分野での連携が考えられるが、今後の目玉になるような取組はあるのか。

・お示しした「軸」は、都心核や生活核の移動の部分に焦点を当てたものであると御理解いただきたい。

○南古谷駅や川越駅は、コロナ禍前の乗降客数に戻っていない状況である。JRでは、羽田空港に直接乗り入れる路線の整備を進める方針だと聞いている。コロナ禍前の乗降客数に戻すためには、川越線を複線化し、羽田空港行きの出発駅の一つとされるような働きかけが必要になる。このような視点を第五次総合計画に取り入れてほしい。

○第三次総合計画の頃から将来都市構造がずっと変わっていないように感じる。都心核、都市的活動核などのほかに学園核を設定して学校を集めれば、変化が生まれて大きな企業が進出してくるのではないか。

○蔵造りの町並みが人気だが、中心市街地以外は自然が豊かで、それはそれとして魅力がある。

「程よく都会で程よく田舎」と表現されることもあるが、それが川越市の魅力だと思う。道の駅のような多くの世代が集まるようなエリアが他にもあれば、いろいろな世代の交流につながるのではないか。

○12 ページで「都市機能の集約化とネットワーク化を促進することによって、多極ネットワーク型の都市構造の構築を進めます」といった表現があるが、第四次総合計画には「多極ネットワーク型の都市構造」という言葉は出てこなかった。この部分に関して、霞ヶ関駅や新河岸駅、南大塚駅、南古谷駅などの駅周辺の地域核も含まれると考えてよいか。

・地域核も含まれると考える。

○南大塚駅の周辺では、シャトルバスが1日2、3便の地域があるが、公共交通が通っているからという理由で、デマンド型交通の停留所が置けない状況である。多極ネットワーク型の都市構造の説明に「それぞれの拠点に容易にアクセスできる都市構造」とあるが、このような現状があることも踏まえて取り組んでいくという理解でよいか。

・御指摘のとおり自宅から少し遠いところにバス停があったり、バスの本数が少なかったりする地域があるという現状は把握している。将来都市構造では、公共交通を使うことによって都市機能にアクセスしやすくなることを目指しているが、どのような形でアクセスしやすくするかについては、今後、個別計画や公共交通の政策を考えていく中でしっかりと検討していきたい。

○市内に幾つかある大学と連携して、川越市にもっと活気を生み出せないか。空き家等を利用して川越市のことを知ってもらえる場所にすれば、大学生や留学生が川越市に住んでくれるようになると思うので、大学生という人的資源をもう少し活用してはどうか。その際、留学生だけでは上手い方法が分からないかもしれないので、日本人の大学生が一緒になると国際交流にもつながると思う。

・現在、市内の四大学と包括連携協定を締結しており、学びの場があることが川越市の強みであると考えている。そのような強みを今後生かしてきたい。例えば、部活動の地域移行の人材確保など、連携協定を踏まえた取組を進めていけたらと考えている。

◎学生と話を見ると、学生はなかなか川越市に住んでくれない。特に留学生は、もう少し便利なところがいいと都心に行ってしまう。そもそも川越市に住んでくれないというところが悩みの種である。

○当日資料3で「色が似ていて区別がつきにくい」とある。赤と緑の区別がつきにくいなど色弱の人もいるので、色を工夫するだけでなく、線の形や丸の形などで区別するといった工夫をしてほしい。

(4) その他

・次回の会議は、7月4日の金曜日の午後2時から第1・第5委員会室にて開催する。また、第6回審議会については、7月10日の木曜日、第7回審議会については、7月22日の火曜日、いずれも午後2時から開催予定である。

5 閉 会